

ソーシャル・ワークとしての廃棄物対策

—ネパールのある女性協同組合の挑戦—

伊 東 さなえ*

「さあ、起きなさい、行くわよ！」
勢い良く起こされて、「はい！」と私は飛び起きた。隣に寝ている末娘を起こさないように、そっとベッドから抜け出して、まだ薄暗い家の中で階段を踏み外さないよう注意しながら、ロビナ・ディディ（ディディはネパール語でお姉さんという意味）を追いかける。時計を見ると、早朝5時前。暗いうちから、パンガ集落の一日は始まろうとしている。

パンガ (panga) 集落は、ネパールの首都、カトマンドゥウからバスで1時間ほどの位置にある。近年、カトマンドゥウから程近いためベットタウン化が急速に進んでいるものの、集落の中心部は昔から住んでいたネワール族によって占められており、レンガ造りの家が立ち並んでいる。もともと農家の多い集落で、ベットタウン化に伴い減少傾向にはあるものの、現在でも米の収穫時期などには、そこかしこでゴザの上に米を広げて干す光景が見られる。

さて、このパンガ集落には「パンガ・マヒラ・サハカリ（パンガ女性協同組合）」という大きな女性協同組合がある。会員数1,400

人。集落内の全てのツール（町内）に設けられた支部の代表からなる理事会により運営されている。女性協同組合という名前のとおり、会員も理事もみな女性である。業務の柱は会員からの月ごとの積立金の収集と小額融資だ。もしこの女性協同組合に入りたいと思った場合、まず、各町内の支部から推薦を受ける必要がある。そのうえで、事務所で登録を行ない、会員証と通帳の支給を受ける。それ以降は、毎月決められた額を積み立てていく。この積立金はいつでも引き出すことが可能であり、加入後6ヵ月が過ぎれば、レストランの開業、子どもの進学、夫の入院など、まとまったお金が必要などときには利子付きで融資を受けることができる。

パンガ女性協同組合の仕事はこれらだけではない。さまざまな形での啓発活動やソーシャル・ワーク（社会貢献活動）を行なっているのである。特に女性の啓蒙や内職の推進・環境改善などを重点課題として取り組んでおり、それ以外にも、災害対策から料理講習会まで、さまざまな活動を行なっている。その中でも、最近、力を入れている事業のひ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

とつが廃棄物対策である。

冒頭に出てきたロビナ・ディディはこの女性協同組合のラチンという町内の支部長である。実家の生業も、嫁ぎ先の生業も農家であった。しかし、現在では夫は建設系の事務所に勤めており、長女はオーストラリアで看護師、息子はカトマンドゥのコンピューター関係の事務所勤務と、家庭全体で十分な現金収入があるため、農業は自家消費分程度である。私が青年海外協力隊としてネパールに滞在していたときにたまたま知り合った彼女は、私のことを「一番上の娘」と呼んでかわいがってくれた。研究のためにネパールに戻った際には、家に泊めていただいた。彼女はソーシャル・ワークに大変熱心な女性である。「小さいときから人の世話をするのが大好きだったし、少しでもこの村を良くしたいの。」一彼女が語る、活動の動機である。

それでは、具体的に何を行なっているのか。ロビナ・ディディたちの活動を通して、彼女たちのソーシャル・ワークの取り組みをみていこう。

朝5時、ロビナ・ディディが「一番上の娘」の私を起こしたのは、女性協同組合ラチン町内支部の有志で毎朝行なっている町内の清掃活動のためであった。ロビナ・ディディに連れられて外に出ると、真っ暗な中、すでにホウキを手に持った女性たちが掃除を始めていた(写真1)。

「この活動を始めて、もう2年になるわ。子どもたちの健康のため、と思って始めたの。」「そうそう、道具も自分たちの家にあるものを持ち寄ってね。」「始めたころと比べれ



写真1 女性たちによる早朝の清掃活動

ば、すごくきれいになった。前は、1日で大きな袋にいっぱいゴミが出たけど、今は4分の1ぐらいになった。」

参加している女性たちは、口々にこう語ってくれた。

「はじめは、町内の各家から毎月10ルピーずつ集めていたのだけれど、なかなかかわかってもらえなくて、大変だったわ。それでも、はじめの1年で集まったお金で、街灯を設置したの。道具も、それで少しは買えたしね。でも、今は各家から集めるのはやめて、野菜の露店を出しに来る人たちから徴収することにしたの。あの人たちはここで野菜を売って稼いでいるわけだし、野菜の屑なんかを捨てるから、一番汚しているし、それに、きれいだとあの人たちにとってもいいはずだから、毎朝、10ルピーずつ徴収するのよ。」

そう説明すると、掃除を終えたロビナ・ディディたちは、早速露店を回り始めた。ラチン町内は中心にあるお寺を囲む形になっている。そのお寺の境内に毎朝、5~10人ぐらいの露天商が来る(写真2)。露天商といっても、近隣の農家が収穫した野菜を売りに来

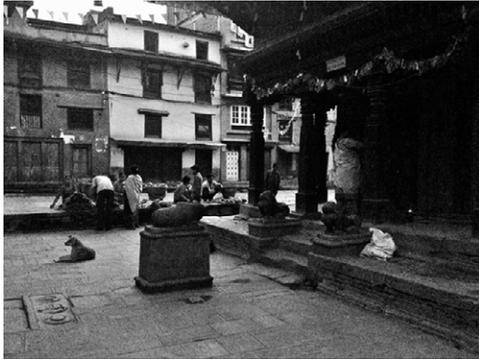


写真 2 ラチン町内
手前がお寺、奥に露店が出ている。

ているのだ。すでにロビナ・ディディたちとは顔見知りなので、10 ルピーの回収はスムーズである。

さて、朝の掃除とお金の徴収が終わると、彼女たちはそれぞれの家へ戻っていく。これから、神様にお祈りをして、お寺にお参りをし、それから朝のお茶の用意をして、子どもたちを起こし、家の掃除をして、ご飯を用意して、とまだまだすることは目白押しなのである。

朝ご飯の時間は大体、9～10 時ぐらいである。ご飯を食べて、夫と息子を送り出して、やっとロビナ・ディディは一息つくことができる。しかし、あまりゆっくりはしてられない。集金に行かなければいけないのだ。

2014 年 6 月ごろから、女性協同組合は新しい事業を始めた。廃棄物処理事業だ。パンガ集落の旧市街地において、「コンポスト化できるゴミ」と「それ以外のゴミ」に分別しての回収事業を開始したのである（写真 3）。正確に言えば、事業を行なっているのは、協同組合の下部組織として新たに立ち上げた



写真 3 パンガ女性協同組合による廃棄物回収

団体である。国際 NGO であるプラクティカル・アクションと行政から初期設備への支援を受け、ごみ拾い人（ウエイスト・ピッカー）を回収作業員として雇うという形で事業を行なっている。

「自分たちの出したゴミが自分たちで始末できるようになったこと、それがこの事業の成果だと思う。自分たちでできれば安心。すでに、少し街中がきれいになってきたと思う。さらに進めて、わたしたちの地域をもっときれいにしていきたい。」

女性協同組合の代表は廃棄物処理事業について誇らしげにこう語ってくれた。

さて、この事業は初期設備に関してこそ国際 NGO や行政の金銭的な援助を受けているものの、今後は金銭的な援助は見込まれない。そこで、活動継続と従業員雇用のために収益の確保が重要になってくる。現在、カトマンドゥ近郊で廃棄物回収事業を行なっている団体は、通常、回収に回るエリアの住人たちから月ごとに 100～300 ルピー程度の金額を徴収し、それを主な収益源としている。また、回収した廃棄物を分別、有価物（紙、金

属、ビンなど)を仲買人に販売するのも収益源となる。パンガ女性協同組合の廃棄物処理事業においても、各家庭から回収料の徴収を行なっているが、この徴収を担当するのが各町内の支部長なのである。登録世帯のリストを元に各家を回り、100ルピーずつ徴収する(写真4)。さらに、途中で新規参加希望者がいるようなら、その届出もしなければならない。そして、徴収したお金を家で計算し、事務所に納める。この一連の集金作業は骨の折れる仕事であるし、時間もかかる。報酬として月に300ルピーが支給されるが、「割には合わないわよ」とロビナ・ディディは笑う。「でも、これはソーシャル・ワークだから。この町をきれいにしたい。そうすれば、健康にもいいし。それに周りの人たちも、『パンガ集落はすごい』と思うでしょう?」

廃棄物処理に関していうのならば、過去にも他の市民団体が分別回収を行なっていた時期があったし、行政がリサイクル可能なプラスチックのみ回収に来ていた時期もあった。彼女たちの事業が始まる前も営利企業がゴミ回収を行なっていた。つまり、少なくともこ



写真4 廃棄物回収料の集金

こ10年ぐらいの間、パンガ集落において廃棄物回収は常になされていたのである。ではなぜ、女性協同組合はこの事業を始めたのだろうか。「信用できないから」と代表は語る。「行政にしても、営利企業にしても、いつ来なくなるかわからないし、時間どおりに来るとも限らない。自分たちでやれるようになった今はとても安心。それに、自分たちのゴミは自分たちで処理するべきだと思う。」

彼女たちの活動には、「利益を自分の周囲の人びとに誘導している」とか、「分別回収が実質上全くなされておらず意味がない」といったさまざまな批判も存在する。また、女性協同組合の内部でも、「上層部の一部が決めた事業であり一部だけが利益を得ている」といった不満が聞かれる。

ロビナ・ディディに話を戻そう。炊事、掃除、洗濯、農作業とその合間に行なうソーシャル・ワークにより、彼女の日々の生活は非常に忙しい。ソーシャル・ワークも、ゴミ回収料の徴収だけではなく、健康に関する啓発活動や災害対策講習会への参加、町内の女性たち、特に問題を抱えている女性のところを回って相談にのること、さらにはお祭りの準備に向けた相談や資金の調達まで、多岐にわたる。あっという間に夜になって、晩ご飯の支度にかかるが、終わるやいなや女性協同組合のミーティングや町内会のミーティングなどに飛び出していくことも多い。ちょっと家事や農作業を手伝っただけで、へとへとになってしまう私の何倍もエネルギッシュな女性なのである。

彼女たちは、地域を良くすることを語り、

語ると同時に実行する行動力ももっている。一方で、たしかに、利益の得られる部分からは利益を得ており、内部でも外部でも、さまざまな批判にさらされている。しばしば諍いも起きている。しかし、それでなお、「地域

を良くすること」を模索し続ける彼女たちの姿、忙しい主婦としての生活をこなしながらも邁進していくそのパワフルでエネルギッシュな姿に、フィールドに赴くたびに私は、感銘を受けるのである。

月のあかり、みずの音

—コンゴ河の記憶—

高 村 伸 吾*

豊かさとは戦争

アフリカ大陸のほぼ中央に位置するコンゴ民主共和国（以下コンゴ）がぼくの調査地だ。これまで2013年と14年の2回、数ヵ月間この国に滞在し、現地調査を続けている。コンゴは豊かな国だ。日本のおよそ6倍という広大な国土には銅・金・コバルトなどの鉱床があり、同時に世界屈指の熱帯雨林や多様な動植物相をもつ。神様がいるかいないのかは分からないけれど、何か特別な恩寵を授けた土地であるかのように思える。しかし、この国の豊かさをもたらしたのは、皮肉にも悲惨な戦争だった。1960年代の独立に伴う政治不安、初代首相の暗殺、長期にわたる独裁政権とその崩壊。資源をめぐる諸外国の思惑に翻弄され独立後の半世紀、この国

から戦争の火種がなくなることはなかった。

1994年、隣国ルワンダのジェノサイドを皮切りに勃発した第1次、第2次コンゴ戦争は周辺19カ国を巻き込むアフリカ大戦の様相を呈し、その過程で540万以上の人命が失われた。2002年のプレトリア合意により名目上、戦争は終結したが、豊かな鉱床を有するコンゴ東部では未だ反政府勢力による資源略取や混乱が続く。その為、隣国ルワンダ・ウガンダとの国境沿いは日本の外務省によって退避勧告地域に指定されている。独立以前、アフリカ諸国のなかで南アフリカ共和国につぐ工業国とうたわれ、経済成長の牽引役と目されていたコンゴは、世界最貧国のひとつにまで転落した。平和合意から10年以上が経過した現在も地域社会再建への道筋は

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 崩落した橋

みえない。

2013年の予備調査では、京都大学で長く調査が続けられている赤道州ワンバ地域の様子を観察した後、東部州を中心にバイクで500キロほど走りまわった。ワンバの人々は、生活を立て直そうと住民組織を作り、共同畑の開墾や魚の養殖など村の生産力を高めようと試みていた。畑ひとつ切り開くのにも膨大な労力と手間がかかる。数人がかりで生い茂る大木を切り倒し、火入れをし、キャッサバの茎を1つずつ植える。人々の必死の努力にもかかわらずこうした取り組みの多くは徒労におわる。売れる商品はあれど、売る手段がないのだ。紛争により橋や道路は寸断され(写真1)、トラックでの農産物買付けは中断した。村までトラックが来てくれた紛争以前とは異なり、今日、農村住民は200キロ以上遠方の、都市近郊の定期市まで商品を売却しに赴かねばならない。直線にしておよそ東京から名古屋ほどの距離を彼らは歩く。子どもの学費や医療費を捻出するため、男たちは30キロにもなる商品を担いで片道1週間以上かけて森林地帯を突っ切るのである(写真2)。過酷な徒歩交易によって彼らは糊口をしのいでいるが、流通の崩壊による極度



写真2 森林地帯をこえて

の商品不足・現金不足から抜け出すことはできない。

紛争から本当の意味で立ち直るためには、いかに作るかではなく、いかに流通に乗せるかという視点が必要だ。農作物が売れば、地域は徐々に回復する。売れなければ、停滞が続く。単純にひとつの農村をみるだけではこの状況は変えられない。農村から都市へ、そして都市から農村へ、ヒト・モノ・カネがどのように移動しているのか、流通の全体像を理解しなければと感じるようになった。1990年代から多くの研究が中断を余儀なくされ、今日の東部州流通を叙述する先行研究はほとんど存在していない。ないなら、自分でやるしかない。

コンゴ河を旅する商人たち

予備調査をおえ半年の準備期間をへて2014年の夏、東部州での調査を再開した。幸い知己をたどり現地商人のひとりとコンタクトをとることができた。州都キサンガニから西方はロケレという民族集団が商品流通を一手に引き受けている。コンゴ河兩岸に居住する彼

らは優れた河川航行の技術をもっており、丸木舟をあやつり市場を基点とした流通ネットワークを広げている（写真3）。そんなロケレ商人のひとりがぼくの同行を許してくれた。

想像以上に彼らの生活はタフだ。ロケレはいくつかの市場を、月曜日はここ、火曜日はここといった具合に、曜日毎に巡回することで生計を営んでおり、多くは5つか6つの市場で商品を販売している。早朝6時から15時まで彼らは露店で商品を売る。その後、商品を梱に入れて丸木舟で次の市場へと輸送し、市場に設置された露店で夜を明かす。1週間の内、自分の村で休めるのは2日ほどだ。5日間は丸木舟で河を行き来している。

はじめの数週間は彼らの生活に慣れるのに精一杯だった。新しい市場を訪れる度に、村の首長に調査の目的を説明し、許可証に署名をもらう。突然あらわれた外人に人々は驚いているようで、市場を歩いていると「モンデレ（現地語で「白人」の意）、モンデレ」という声がそこかしこで聞こえた。「こんなところまで何しに来たんだ」と幾度も問われる。警戒と緊張が入り交じった空気だ。ひと

りひとりにじぶんの名前を告げ、何をしているかを伝える。理解してもらえるよう説明をし、彼らとおなじ生活をするよう努める。商人とともに河を丸木舟で遡上し、市場の食堂で昼食をとり、露店のなかで眠る。生活をともにするうちに少しずつ安心感もましていった。「シンゴ、また地図描いてるのか」「シンゴ、朝からなにも食べてないよ」等々、見知らぬ「モンデレ」から「シンゴ」に昇格した時はなぜだかとても嬉しかった。

調査も中盤を迎えた8月中旬、まだ暗いうちから市場を歩いてはや5時間、雑踏にもまれへトヘトだ。照りつける太陽になかば朦朧としながら、市場の地図を描く。昨日までは閑散とした寂しい村だったのに、週に一度の市の日には路地という路地が人で埋まる。数メートル歩くのにも苦勞する。

数百の露店にはサンダルや布、衣服、はてはスーツケースやラジオ、14インチほどのテレビまでが並べられている（写真4）。赤やオレンジ、緑など鮮やかな色の服で着飾った女性たちは商品を慎重に選んでいた。50円ほどのサンダルを手にとり、裏返し、



写真3 河を旅する



写真4 市場の様子

プラスチック製のストラップがはずれないか指でひっぱったりしている。露店で売られるビスケットをねだる子どもの表情は明るい。昨日までの様子とは違ってかわってお祭り気分が村全体をつつんでいる。

11時頃、市場の一角にある食堂で遅めの朝食をとる。売り子の喧噪や人々の熱気であふれる辻をさけて食堂でぼんやりする。スプーン山盛りの砂糖が5杯、ズキンとするほど甘いコーヒーにも慣れた。疲労で空腹感はないが、食べないとやせる。調査にも支障がでる。フランスパンをむりやりコーヒーで流し込む。無数の人々をかいくぐり描きあげたA4用紙10枚になる市場の地図を眺めると、ちょっとした達成感だ。少しずつデータも集まってきている。

ここだけの景色

3日ぶりに拠点にしているホテルに戻り休息をとる。衛星電話でメールを確認すると「緊急：コンゴでエボラ発生の疑い」という件名が目につき、背筋がぞくとした。日本の報道は過熱しているようで家族や友人から連絡が殺到している。なかには帰国をすすめるものもある。滞在1ヵ月どうにか目の前の課題をひとつずつこなしてきたが、このメールはさすがにこたえた。でも、ゆっくり考えている暇はない。次の市場へと移動するために友人がもう部屋の前まで来ている。荷物をまとめて船着き場へと急ぐ。

真っ黒な水面には全長12メートルほどの丸木舟が浮んでいた。トーチをかざして船体を確認する。船首と船尾に船頭がひとりず

つ、身の丈ほどの櫂をもってたたずんでいる。船の中央には商品が山積みされ、雨よけのブルーシートが覆っている。煮炊きの鍋や七輪が無造作に投げ込まれていて人が乗るスペースは限られる。10人ほどの商人がおのおの身をよせあってタバコを回しながら談笑していた。いつもであればタバコの輪に参加し軽口を叩くのだが、今は余裕がない。様子から何かを察したのか、友人たちはしっかり休めよと広めの席をあてがってくれる。9時過ぎ、舟は動きだした。商品を背もたれにしてどうすればいいかを思案する。大使館への連絡、西アフリカの状況、コンゴ国内でエボラが拡散する可能性。最悪の事態を想定しながらとりうる行動を羅列する。腕をくみ、目をつむって考えこむ。未確定の情報だったが、不安はつまった。

1時間ほどたっただろうか、いつのまにか人々の声はやみ、水をかく音だけがずっと体ひたひたに響いてきた。ゆったりとした、こちよいリズムだ。頭のなかをめぐっていた心配ごとがふっと静かになった。目をあけると月のあかりが水面を照らし、数分毎にひらけた空を星がながれていく。人工の光がないこの場所では星がよく見えた。「大丈夫だよ」なにかがそういつてくれているような気がした。

—あれから約10ヵ月、もうすぐ今年の調査がはじまる。調査範囲を広げ、河から遠い地域も含め踏査するつもりだ。実施に伴う手続きは膨大なものになるだろう。移動手段や安全の確保、首長との交渉、不測の事態への対応に神経をつかわなければならない。今まででもトラブルはあったし、たぶんこれからも

ある。ただ、どうにもならないと追いつめられた時、投げ出したいと思った時、ぼくはあの夜のことを思い出し、小さな前進を試みるのだと思う。コンゴに来て一瞬一瞬を積み重

ねる内になぜかどうにかなるだろう、そんな楽観もわくようになった。この国がぼくにかけた不思議な魔法だ。

森の秘密会議

—コンゴ民主共和国ワンバ村の調査から—

横塚 彩*

アフリカ中央部に位置するコンゴ民主共和国。私の調査地は、首都キンシャサからチャーター機で4時間、更に悪路をバイクで走ること3時間のところにあるワンバ村である。私は大型類人猿ボノボとワンバ村の人々の共生関係の成り立ちを調査するため、2014年11月から3ヵ月半フィールドワークを行なった。ワンバ村では民家にホームステイをしていた。

「マダム、これから森にヤシ酒を飲みに行く。一緒に行こう。」そう声をかけてくれたのは、ホームステイ先のお父さん。ホームステイの初日、雑談の中で私がヤシ酒が好きだと言うと、それ以来、手に入る時は、朝食前や、夕食後にヤシ酒を用意してくれていた。

ヤシ酒は、東南アジアや赤道付近のアフリカ地域で飲まれている醸造酒である。私の地



写真1 採取したばかりのヤシ酒

域では主に、アブラヤシやラフィアヤシを切り倒し、その頂部の裁断面から溢れる樹液を集めて発酵させる。ヤシの樹液は白濁色で、取れ立てのヤシ酒は甘みが強く、スポーツ飲料のような味わいだ。樹液を採取した後2～

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

3時間放置すると、糖分の発酵によってアルコールが発生する。更に時間を置くと発酵が進みすぎてしまい、甘みより苦味の強いヤシ酒となる。ワンバの人々もそのようなヤシ酒は「Ezali mabe（これはひどい）」と言って飲もうとしない。ヤシ酒は保存の効かない“時間勝負”のアルコール飲料なのである。

ホームステイ先のお父さんについて森の中を歩くこと約5分。突然開けた場所に出た。そこには、倒されたアブラヤシの樹が1本あり、男性3人がその周辺で草刈りの仕事をしている最中のような様子だ。お父さんが「ヤシ酒を飲むぞ」と男性たちに向かって叫ぶと、彼らはヤシの樹の周辺に集まってきた。皆でヤシを囲むように座ると、お父さんがヤシの樹の裁断面に設置した樽のようなものを取り出した。白濁したヤシ酒には、集まってきた無数のアリが浮いていた。お父さんはプラスチック製のこし器のようなものを使い、私の

コップに取れ立てのヤシ酒を注いでくれた。樽の中を見た時は、大量のアリの姿に少し困惑したが、こしてくれたお陰で虫が混じっていることはなかった。

男性陣は小さな急須のような形をした木製のコップにヤシ酒を入れて回し飲みをしていた。注ぎ口には口をつけずに、自分の口とちょうどいい距離を保ちながら、上手にヤシ酒を飲んでいく。その姿が面白く、笑いながら見ていると「マダムもやってみる？」とお父さんが私にコップを渡してくれた。今まで顔より高い位置から落ちてくる飲み物を飲んだことがなかったので、どれくらいの高さにすればいいか、どれくらい顔から距離をとればいいのか分からず、考えながらやっていたら、コップの先が口に触れてしまい、とても難しかった。

ヤシ酒を回し飲みしながら男性は、おしゃべりを楽しむ。後々考えてみると、朝も昼も暇そうに家の外の椅子に腰掛けているお父さ



写真2 ヤシの樹の裁断面の下に樽のようなものを置き採取する



写真3 回し飲み用のコップで飲む男性。なかなか口に入れるのが難しい！

んの姿が、夕方になると時々見えなくなることがあった。理由を聞くと、「ヤシ酒を飲みに行っていた」と答えることが多かった。コーヒブレイクならぬヤシ酒ブレイクは、女性や子どもが立ち入ることの許されない男性だけの秘密のひとつのように感じられた。

大人の男性だけでなく、小学校高学年くらいまでの男の子たち数人と森へ遊びに行った時にも同じような体験をした。

ポノボのリサーチステーションに滞在していたある日、基地の裏庭を子どもたちが通り過ぎる姿が見えた。そこには、森に通じる道があり、子どもも大人もその道を利用する。「どこへ行くの？」と声をかけると、「畑にキャッサバの葉っぱを取りにいくよ。マダムも一緒に行こうよ」という。その日は調査が休みで予定もなかったもので、子どもたちと連れ立って森を歩くことにした。子どもたちは葉っぱや果物や昆虫を指差し、私にその名称や、美味しいかまずいか、ポノボも食べるかなど、色々なことを教えてくれた。私の前を歩いていた裸足の子どもは、段差やつまずきそうな幹があるところを見つけては、「気をつけて」と声をかけてくれた。しばらく歩く



写真4 子どもたちと森を散歩中

と畑に出たので、ひと休みしようと皆で大木に腰掛けた。すると、子どもたちは、「マダムの国の写真を見せて。キンシャサの写真はある？」と私の携帯電話の写真をせがんだ。私が一枚一枚解説しながら写真を見せると、子どもたちは小さな携帯電話の画面に釘付けになっていた。森から戻る途中もまだ子どもたちは写真に写っていた飛行機や、キンシャサの風景や日本の食事について、たくさんの質問をしてきた。ワンバではなかなか見る機会のない写真の中の世界に興味津々の様子であった。リサーチステーションの前で「もう帰るね」と別れると子どもたちは意外とあっさりとして私を基地に帰してくれた。後日、森を散歩した子どもたちを含めた複数の子どもたちが遊んでいる場に出会っても「写真を見せて」と言ってくることはなかった。森での散歩からしばらく経ったある日、リサーチステーションの裏庭で、一緒に森を歩いた少年のひとりに遭遇した。彼は私の顔を見るなり、「マダム、森で見せてくれた写真を見せて。あの時のリンガラミュージックも聞きたい」と、内緒話をするようなトーンで言いな



写真5 携帯電話の写真に夢中の子どもたち

がら寄ってきた。

私は、この少年がひそひそ声で「森でのおしゃべり」について話してくる姿を見て、「森でのおしゃべり」は、たくさんの人がいる村の中とは異なる特別な状況下で行なわれるものだと感じた。そこには、なにか秘密の共有めいたものがある。

ワンバ村では、住居の裏には森が広がっており、人々は日々の生活の中で、日常的に森での仕事を行なっているのだが、森の中で複数人集まって話をするというのは、「特別感」というか、その場にいる人だけが共有できる秘密の何かがあるように感じた。男性が森の中でヤシ酒を楽しむ時には、決して妻や子どもには聞かれてはいけないこと、子どもが森でおしゃべりをする時には、母親や他の兄弟や友だちには内緒にしたいことを、こっそり

みんなで共有しているようである。多く人々がいる「村」と、自分の近い人だけで入る「森」という場を、一見境界がないようにみえても、子どもや男性は異なる場として認識しているのではないだろうか。

もちろん女性も、女性同士の会話を、男性や子どものいない時、たとえば畑や森での採集活動、水汲みや洗濯の時などに楽しんでい

るのである。こうして時々秘密の会議に招き入れられると、ワンバの人に受け入れられたような気持ちになり、内心少し嬉しい。子どもや男性の日々の生活の中にも、私の調査のヒントは潜んでいるのではと思う。今後も「森に行こうよ」と言われたら、二つ返事で同行させてもらい、秘密会議に出席させてもらいたいと思う。

カンボン 失われつつある居住地とそこに生きる人々

水野 久仁香*

市街地へ向かうバイクや車がひっきりなしに行き交うスディルマン通りの橋の上から、下を見下ろせば川沿いに広がる家、家、家…インドネシア語で谷 (*lembah*) といわれる、ジョグジャカルタの町に流れるチョデ川

の斜面。そこにある居住地を初めて訪れたのは、もう3年前のことだ。2012年4月、私はジョグジャカルタにあるガジャマダ大学の先生に連れられてやって来た。居住地の入り口を示すガプラ (*gapura*) という門をくぐ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真 1 眼下に広がるチョデ川の光景

り、崖のような川の斜面をくだり、橋の下へ向かっていく。すると竹でできた色とりどりの家がひしめく迷路に迷い込む。そこには会釈をするにつこりと笑顔で返してくれる老婆や元気に走り回る子どもたちがいた。

インドネシア人の故郷—ジョグジャカルタ

何千もの島から成り立つインドネシアのジャワ島の真ん中に、ジョグジャカルタ特別州がある。ジョグジャカルタは、かつて数多くの王国が栄枯盛衰を繰り返した末に誕生した王朝の都である。この地が特別州と名付けられ、ジャワの古都としての地位を保っている理由は、町の王宮に今も暮らすスルタンと呼ばれる王様の存在が大きい [佐藤ほか 2002]。

ジョグジャカルタには、断食明けや祝祭日の重なる長期休暇になると、全国から観光客が訪れる。町中の宿泊施設はすぐに満室になってしまう。時代を問わず、ジョグジャカルタは、人々の休息地であり、故郷なのであろう。

また、ここでは創作活動が盛んだ。伝統的なジャワの芸術はもちろんのこと、芸術家や若者を中心に、政治や宗教など社会的タブー

に切り込んでいく鋭い作品を制作する人たちも多い。社会の多様な人間を受け入れる、寛容な町としてジョグジャカルタは発展している。

裏路地の世界、カンボン

カンボン (*kampung, kampoeng*) は、マレー語もしくはインドネシア語でムラ、集落といった意味合いがある。その発生経緯は、計画的に建てられた住宅地とは対照的に、農村や地方からの流入者が脇道を埋め尽くすように家を立て、やがて迷路のように密集した集落を作り出したと考えられる。

カンボンの居住者は貧困層が多いといわれる。密集していて小汚いため、スラムのような様相を呈しているが、必ずしもマフィアや薬物中毒者が潜んでいるような危険な場所ではない。住民たちは決して裕福でないものの、コミュニティの冠婚葬祭や年間行事を通して同じ時間を共有し、毎日たわいもない冗談に花をさかしている。これまで多くの研究者が、都市部のカンボンに、インドネシアの農村の穏やかな人々の暮らしを重ね合わせてきた。

また、カンボンは地域ごとに呼び名をもっており、その由来は土地の歴史やかつての人々の暮らしを想起させるものも多い。たとえばジョグジャカルタでは王宮の馬を世話していた家臣ガメル (*gamel*) たちの居住地カンボン・ガメラン (*gamelan*) や、王宮に献上する家畜を屠殺する家臣ジャガル (*jagal*) たちの居住地カンボン・ジャガラン (*jagalan*) などである [Setiawan 2010]。ただ、私が訪れるのは王宮の歴史とは関係のない居住地で

ある。カンボン・チョデといわれるこの場所は、チョデ川という河川のわきにひっそりと出現した。1960年頃、まだジョグジャカルタの人口も少なく、チョデ川の周辺が木々で覆われていた頃、近隣の県などから土地も家もなく放浪していた者が集まってきて、掘建て小屋を建て、暮らし始めた。つまり不法占拠によって出現した居住地だった。その後、スハルト権威主義体制の度重なる居住地の撤去政策に耐え、このカンボンは激動を乗り越えていく。

カンボン・チョデと反政府運動

チョデ川の周辺に発生した居住地は、しばしば川の氾濫による被害を受けていた。今でも雨期になると一度は大洪水が起こるとチョデ川付近の居住者はいう。1984年に、ジョグジャカルタには大雨が降った。それにより河川敷およびその付近で家屋30棟が流出、156棟が浸水、339棟が被害を受けた[平尾ほか 2003]。その後ジョグジャカルタ政府は河川敷の居住地の一斉撤去に乗り出す。その理由は、洪水の被害から居住者を守ることだったが、住宅に火を付けられたり壊されたりしたこと、おそらく政府は違法な者たちによって占拠されていた河川敷を、一掃してしまいたかったのだろう。カンボン・チョデをはじめとする貧者たちは、あてもなく逃げ出すしかなかった。

しかし、マンゲンウィジャヤ(Mangunwijaya)という人物は、ジョグジャカルタ政府の強制的な居住地の撤去に猛反対した。彼はインドネシアの有名な国民的作家、建築家、牧師そ

して活動家であった。強制撤去の始まる前の1983年から、すでに弟子たちとともにカンボン・チョデに住み始め、居住者の社会経済的な向上や住宅建設に努めていた彼はジョグジャカルタ政府の強行的な開発手法に異議を唱え、周縁化された不法占拠者の自立を促す支援の必要性を訴えた。そしてそれが学術関係者や教会関係者を巻き込み、世論に大きな反響を呼んだのである。

このような必死の抗議活動が実を結び、カンボン・チョデおよび河川敷の多くの居住地が撤去を免れた。カンボン・チョデの場合、住民の土地の所有権は認められなかったものの、正式なカンボンとして自治体に登録され、居住者は社会サービスを受けることができるようになった。そして再び、カンボンには穏やかな日常が戻ったのである。

変わる景色と変わらない景色

現在、インドネシアのカンボンは消滅の危機にある。なぜならば都市部の近代的開発や利便性向上に伴って、民間企業がカンボンの土地を買い占めているからだ。住む場所を失った人々が移住を迫られる例は少なくない。

しかし今のところ、ジョグジャカルタのカンボン・チョデは生き残っている。カンボンができてから60年ほどが経過した。ここでは活動家であるマンゲンウィジャヤがモットーとしていた「貧者の自立」が受け継がれ、住民とNGOなどの活動が維持されている。住民たちは頼母子講、宗教行事、地元の学生との文化交流に勤しむ。そのようなカンボンの経緯や取り組みが全国的に知られ、不



写真2 チョデ川付近に建設中のホテル

法占拠で出現したカンボンの成功例として紹介する知識人も多い。ただ、居住者の多くは今も非常に貧しい。カンボン・チョデの実情を知って私が驚きを隠せないのは、今でも他地域からの貧しい放浪者がやってきて、密かに橋の下に身を寄せ、住みついてしまうことだ。河川敷の、橋の下にあるカンボンは、身分も生まれもわからない人間をかくまってくれるような避難所なのか。時代が変わっても、貧困はこうやって同じ場所に再生産されるのか。

2014年8月17日、インドネシア独立記念日前夜の祝賀会がカンボン・チョデで開かれた。私は川沿いに建てられたステージの前に敷かれた御座に座って、音楽を聞いたり、住民とおしゃべりをしたりして楽しんだ。乾いた風が川沿いへ吹き込んで、とても気持ちがいい。ふと、私が座しているところからオレンジ色の街灯がともる橋を見上げる。橋の上にも多くの若者がたむろして思い思いの時間を過ごしているが、橋の下には限られた者しか入れない。まるで自分は別世界にいるようで、なんともいえぬ安心感を覚えた。



写真3 カンボン・チョデの入り口

遠く離れた私の故郷

朗らかで楽しそうなカンボンの暮らしといても、2,509 m²ほどの川の斜面に160人が生活しているため、実は話はそう簡単ではない。妬み、金銭トラブル、家族の断絶、そこに住む人間の泥臭いドラマが日々展開されている。しかし住民が語る長い長いインタビューは、「まあ、人間だからしょうがないね (*kan, namanyamanusia*...)」といった、どこか開き直った言葉で締めくくられる。

こうやって、今日もチョデ川の人々の平凡な暮らしが続く。私は遠く離れた日本で、またあの泥臭くて温かい世界に戻りたいなどふと思っては、インドネシア人が大好きな Facebook をおもむろに開く。するとカンボン・チョデの住民たちが載せる日常の光景が目飛び込んでくるのである。

引用文献

佐藤愛彦・俵 純治・染谷臣道. 2002. 『NHK スペシャル アジア古都物語 ジョグジャカルタ 支え合う王と民』日本放送出版協会.
平尾和洋・高尾克樹・瀬戸口健・長谷川豪. 2003. 「インドネシア・ジョグジャカルタ市のロモ・マゴン・カンボンの居住環境改善経過に関する

考察」『日本建築学会計画系論文集』574: 105-112.

Setiawan, B. 2010. Kampung Kota dan Kota Kampung: Potret Tujuh Kampung di Kota Jogja. Pusat Studi Lingkungan Hidup Universitas Gadjah Mada.

ジャカルタパンクと政治

金 悠 進*

ああ マルシナ あなたは取り残された
ああ マルシナ あなたの死は無駄にはな
らない

(MARJINAL / 「マルシナ」 *Marsinah*)

2014年9月、インドネシアの首都ジャカルタで、モヒカン頭に全身タトゥーをしたパンクロックバンド、マージナル (MARJINAL) が「マルシナ」の歌を歌っていた。私はその路上ライブを静かに目に焼き付けながら、彼らの歌から込み上げる怒りと、そこに秘められた切なさのようなものを感じた。

労働運動が厳しく制限されていたスハルト権威主義体制期の1993年、女性労働者マルシナ (Marsinah) は労働運動を率いたことから、24歳の若さで軍に虐殺された（「マル

シナ事件」）。マージナルは彼女の死を無駄にしないために、バンド名を MARJINAL (インドネシア語読みで「マルジナル」) にした。ボーカルのマイク (35) は、1996年、21歳のとき、ジャカルタ芸術大学 (IKJ) 在籍時に「打倒スハルト」の学生運動に参加した。マイクはデモの途中、ベース・ウクレレ・コーラスを担当する相方のボブに出会った。ふたりは「デモだけでは何も変わらない」、「この運動をさまざまな表現でサポートしなければならぬ」と考えた。しかし、言論と表現の自由が抑圧された中でスハルト独裁体制に抵抗するためには、何か工夫を凝らす必要があった。マイクとボブのふたりは仲間とともに、タトゥー、版画アート、そしてパンクを始めた。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 マイク

ギターには2004年に暗殺された人権活動家ムニールのステッカーが貼られている。

パンクスになったマージナルは、ベースキャンプであり生活共同体でもある「タリンバビ (Taring Babi)」を運営し始めた。私はアポなしでここを訪問したが、マージナルのギタリストとそのスタッフが快く受け入れてくれた。普段はオープンスペースとして、パンクスや近所のストリートチルドレンを受け入れ、共同生活をしているという。1997年アジア通貨危機に端を発するスハルト体制崩壊によって、インドネシアの政治は混乱し、失業率は上昇、ジャカルタの街にはストリートチルドレンが溢れた。路上で物売りをする子どもたちが「プレマン (日本でいう「ヤクザ」)」に勧誘されることに危機感を感じたマージナルは、積極的に街へ出て、ストリートチルドレンを見つけてはタリンバビに受け入れた。タリンバビの中には辞書や本が積み、教育費が高くて払えず、学校に通

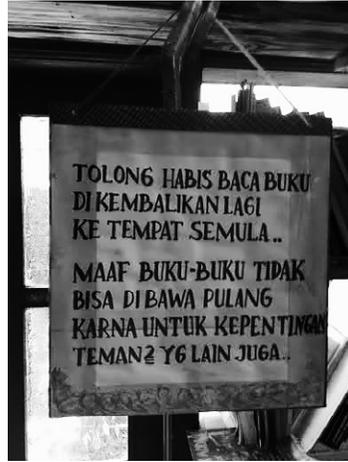


写真2 タリンバビの本棚

「本を読みなさい。本は持って帰らないで。」

うことができないストリートチルドレンに読書の大切さを伝えている。「政府に頼ることなく、自分たちが生きる術を自分たちで習得しなければならない。」マイクは力強く言う。マージナル・タリンバビはそのための材料を「シェア」する。彼らは決して「与える」とは言わない。彼らも子どもたちから学んでいるのだと言う。

近年ジャカルタには、「プガメン (路上ミュージシャン)」の中にウクレレを演奏する10歳前後の子どもたちがいる。その中には、マージナルから直接ウクレレの弾き方を伝授してもらった子どももいる。マージナルは路上サバイバル術のひとつとして、ギターより安く、小さい手の子どもでも弾きやすいウクレレを子どもたちにすすめた。

マージナルの思想の根幹には、このような10歳前後の子どもたちが教育を受けられないのは「人権侵害」であるとの考えがある。彼らはそのような人権侵害の解決に及び腰の



写真3 タリンバビの内壁の版画

中には「タトゥーは犯罪じゃない (TATOO BUKAN KRIMINAL)」という版画も。

権力者を20年近く批判してきた。彼らがタトゥーをするのも、1980年代前半にタトゥーをしたゴロツキが国家主導で虐殺された「ミステリアスな射殺 (Petrus)」事件に対する抵抗である。タリンバビの内壁には一面に版画が貼られていた。スハルトや国軍の人権侵害を批判する痛烈なメッセージが込められたものが大半である。

帰り際、入り口に掲載された予定表を見つけた。そこには「日曜日 (カーフリーデー)、朝6時、ホテルインドネシア前、ライブ」と書かれていた。私はメンバーに「必ず見に行く」と伝え、タリンバビを去った。

日曜日当日、カーフリーデーでジャカルタの目抜き通りとして知られるスディルマン通りは、朝6時から多くの人でにぎわっていた。ホテルインドネシア前に行くと、ライブステージの隣で、版画ワークショップが行なわれていた。マージナルはこの日のトリをつとめるという。出番まで観客に版画を教えていた。10時、やっとマージナルの出番

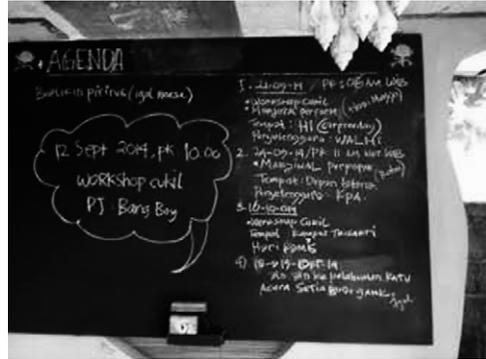


写真4 タリンバビにあるマージナルの予定表

「日時：2014年9月21日日曜日朝6時／小ワークショップ、マージナルパフォーマンス／場所：ホテルインドネシア前 (カーフリーデー) /主催：WALHI (環境保護団体)」



写真5 路上版画ワークショップ

だ。ライブ開始予定時刻の6時からすでに4時間が過ぎていた。マージナルを何年も追い続け、ドキュメンタリー映画「マージナル＝ジャカルタパンク」を日本で上映した中西あゆみ監督によると、「それでも (開始4時間遅れでも) 見られたのは奇跡ですよ。ライブをしないなんてことは日常茶飯事」とのこと。ステージ前には老若男女、多宗教多民族、富裕層貧困層、多種多様な人が集まっていた。その日のライブステージでは最多の観



写真6 路上ライブ

客数である。お世辞にも上手とはいえない演奏技術である。しかし、そこからはすさまじいエネルギーを確かに感じとることができ、胸が熱くなった。

女性労働者が汗を流して働く姿が見える
彼女の汗のしずくがこの地を輝かせている
でもあなたが費やした強大なエネルギーは
そんなに大きくは感じられていない
傲慢さに押し流され あなたは忘れられて
いる



写真7 マージナルのメンバーと筆者

ああ マルシナ あなたは取り残された
ああ マルシナ あなたの死は無駄にはな
らない

「マルシナ事件」から 20 年以上が過ぎた。
しかし、その真相は闇に葬られている。パン
クの激しいリズムに乗って流れる「マルシ
ナ」の歌は、1990 年代のインドネシアにお
ける反スハルト運動時の労働者、人々の怒り
を、いまでも代弁している。